

Little Dorrit におけるプライド

平野 絹代

I

Little Dorrit に登場するジョン・チヴェリーは女主人公を恋する滑稽な人物であり、*Bleak House* のガビーとよく似ている。しかし彼らの間にはある基本的な相違がある。彼らは共に滑稽な姿にめかし立てて自信をもってわが恋する女主人公に求婚に行き、相手にされないで驚く。ガビーは断られても平気であり、絶対に今までの自信は損われない。チヴェリーは相手の気持を知ると二度と煩わそうとしないばかりか、彼の手前ではライバルである男への彼女の恋の橋渡しにさえなる。そこに働いているのは、滑稽な彼に感服を与えている善良な自尊心である。このようにガビーとチヴェリーにはプライドの有無の相違があり、ガビーは彼独得の自己中心的な倫理に従って行動するのみであるのに対して、チヴェリーはプライドを通して「他」を意識して行動を反応させているからより複雑である。ディケンズは中期以後から次第に人物にプライドをもたせそれを通して内面を周囲に反応させるようになった。*Bleak House* は後期に属する作品であるが、その中の人物ガビーは明らかに前期的人物であり、チヴェリーは後期の特徴の一例をあげるために引合いに出したにすぎない。

このプライドの反応による心理描写は、分析的になった中期以後のディケンズの一大特徴であるが、ドンビー、ドリット、ピップへと心に悩みをもつ中心的な人物の中に掘り下げられていった。彼らは自らのエゴイズムのために抜き差しならぬ事態（精神状態）に追い込まれるのであるが、そのために前期のエゴイストとは決定的に違っている。たとえば *Martin Chuzzlewit* のベックスニ

フは責められてもあばかれてもびくともしない単純な偽善者であるが、ドリットの偽善は絶えず責められることを恐れてプライドを傷つけられているのであるから複雑である。この小論は最も後期的人物に富む作品の一つである *Little Dorrit* の心理分析をし、プライドの働きを明らかにすることを目的とする。*Little Dorrit* はしばしばフロイト的説明が加えられる⁽¹⁾ が、ディケンズはフロイトを知っていたわけではなく、本能的な知覚の結果であり、ここではディケンズが中期以後の作品一般に通じて意識的に描いたと思われるプライドの基本的な働きを追究したい。

II

チヴェリーが大金持ちになったドリットを訪問する場面は二人の心理を微妙に反映しているが、チヴェリーのプライドに注目しよう。チヴェリーは単に御機嫌伺いの目的で来ただけである。しかし過去の恥辱をすべて洗い流してしまおうとしているドリットにとってそれを思い出させる彼の出現は脅威であり、侮辱と受取れた。以前に知合いであったことを押し付けに来たのではないか、彼によって過去が人に知れるのではないか、という疑いや懸念がわいてくる。そこで横柄にチヴェリーを扱う。

‘What else did you come for, sir?’

‘Nothing else in the world, sir. Oh dear me! Only to say that I hoped you was well, and only to ask if Miss Amy was well?’

‘What’s that to you, sir?’ retorted Mr. Dorrit.

‘It’s nothing to me, sir, by rights. I never thought of lessening the distance betwixt us, I am sure. I know it’s a liberty, sir, but I never thought you’d have taken it ill... in my poor way, I am too proud to have come, I assure you, if I had thought so.’

Mr. Dorrit was ashamed. He went back to the window... he had been wiping his eyes and he looked tired and ill. (Bk. II, ch. XVIII)

このようにチヴェリーを傷つけたものは階級の意識である。ドリットの横柄さは多分に恐怖による強がり混っているのであるが優越者の態度であり、後者

の方がチヴェリーには敏感に響くのである。この階級の差によって刺激される自尊心は中期以後においてディケンズがよく扱ったテーマであり、このために人物間の関係がうまくいかないのを我々は意識するであろう。 *David Copperfield* でディヴィッドやペゴティ一家とスティアフォース家の間に感情のくいちがいが生ずるのもそれが原因の一つであるし、 *Bleak House* では貴族デドロックと実業家ラウンズウェルとの対立にそれが露骨に見られるし、 *Great Expectations* ではエステラがピップの心を傷つけ、又ピップとジョーやビディーとの間に溝が生ずるのであるが、そこにはその微妙な自尊心の働きが見られる。

さてチヴェリーのプライドは 'sense of what befits one's position, preventing one from doing unworthy thing' (C. O. D.) であり、正当な自尊心である。善良な人物は皆この自尊心をもち、彼らなりの威厳を与えられているのであるが、その代表がリトル・ドリットである。最底の生活の中に彼女を支えているのは正当に働いて一家を、特に父ドリットを扶養していることに対する自尊心である。だから一家が監獄に居ることを恥とせず、自分の支える、または築いたともいえる家族の居場所としてそれに誇りさえ抱いて 'home' と呼ぶのである。クレナムが父親に金を与えるのを見ると自尊心を傷つけられて与えないようにと懇願する。プライドが高いと自称する父ドリットや姉フエニーが平気で金や物を受取るのと比較するとよい。リトル・ドリットは、傲慢なプライドをもって現在の状態に不満をもち、自ら建設的なことはせずに他人または不運のせいにして悲劇的になっているいわゆるエゴイスト達、ドリット、フエニー・ドリット、ミス・ウェイド、ミセス・クレナム等の対照となっている。

III

ドリットはなるほど紳士の出である。しかし長年にわたる負債者監獄での生活のために今では事実上他人の世話に頼る乞食に近い身になっている。しかし長年入獄しているということで 'the father of the Marshalsea' と呼ばれ、紳士の出であるために尊敬されると、紳士の出であることに空虚な誇りを抱くよ

うになる。そして他の囚人や訪問者から金を贈られるようになるとこちらから催促さえするようになり、しかもそれを自分への敬意のしるしとして ‘Testimonial’ という名目で得々と受取るという偽善ぶりを発揮する。この空虚な実力に対する誇りがドリットのプライドである。これは先程あげた C. O. D. のプライドの定義を否定したものであり、リトル・ドリットの正当なプライドは彼女を墮落から救っているのに対して、ドリットの傲慢なプライドは彼を墮落へと導いている。他のいわゆるエゴイスト達についても同様のことが言える。

さてドリットの空虚な実力に対する誇りであるが、これが彼の内心では本物でないところにドリットの複雑さがある。彼はその誇りを押し立てて他人をも自己をも偽ろうと必死になるが、心の片隅には絶えず劣等感があってその誇りを脅している。後、上流社会の席上で再びマーシャル・シアにいと錯覚して演説した言葉の一部を引用すると、

...pecuniary Testimonials. In the acceptance of those—ha—voluntary recognitions of my humble endeavours to—hum—to uphold a Tone here—a Tone—I beg it to be understood that I do not consider myself compromised. Ha. Not compromised. Ha. Not a beggar. No; I repudiate the title! (Bk. II, ch. XIX)

この乞食でないという自己弁護的な主張によって彼の内に乞食同然の身であるという意識があることがわかる。彼はこの劣等感のために絶えずプライドが傷つき易くなっており、意図のないところに意味を見出して自ら傷ついている。そして卑下や自己憐憫に陥る。たとえば牢番の一人、チヴェリーの父親にいつもになく軽率なあしらいを受けると、恥辱を感じ、表面は威張って堂々と部屋に引き上げるが、部屋に入ってからつぎのように激しく卑下したり、悲劇的になったりする。

By little and little he began; laying down his knife and fork with a noise, taking things up sharply, biting at his bread as if he were offended with it... At length he pushed his plate from him, and spoke aloud. With the strangest inconsistency.

‘What does it matter whether I eat or starve? What does it matter whether such a blighted life as mine comes to an end... What am I worth to any one? A poor prisoner, fed on alms and broken victuals; a squalid, disgraced wretch!’.....

‘O despise me, despise me! Look away from me, don’t listen to me, stop me, blush for me, cry for me—Even you, Amy! Do it, do it! I do it to myself!... (Bk. I, ch. XIX)

ここで ‘Even you, Amy! Do it, do it!’ と言うのはエイミー（リトル・ドリット）にはうしろめたさがあるからである。この少し前にエイミーにチヴェリーを追うままにさせておくように、という意味のことを言い、彼女が堪えられなくなっていたわるように父を黙らせたのであるが、自分の言ったことを恥に思う気持がこの投げやりな言葉となつてあらわれている。ここや、第二節に引用したジョン・チヴェリーとの会見で恥を感ずるところにもあるように不断心の奥底に追いやっていた良心に触れることがある。しかし余りにも自分のことばかり思っていてそれが表面に出る余地がない。すぐその後で、

‘And yet I have some respect here. I have made some stand against it. I am not quite trodden down. Go out and ask who is the chief person in the place. They’ll tell you it’s your father. Go out and ask who is never trifled with... (Bk. I, ch. XIX)

という具合に、再び吹聴的になるのである。良心は表面に出ない中に直ちに紳士の出であることや獄内での威厳への固守によって追い出されてしまう。こうしてドリットは自己を偽るのであるが、貶しめられることを恐れるプライドがそうさせるのである。このように彼のプライドは劣等感や疚しさと裏腹になっていてそのために病的に鋭敏になっている。そして自分で自分を傷つけて益々神経病的になっている。

それがさらに進行状態になったのがミス・ウェイドである。彼女が自ら書いたことになっている ‘The History of a Self Tormentor’ は表面は、彼女がひねくれた人間になる過程を環境の点から述べたものである。しかしこれはタ

ティコーラムの言 (Bk. II, ch. XXXIII) によって全く歪められたものであり、原因は環境というよりむしろ彼女の心的態度にあることがわかる。つぎの引用は子供のとき初めてこの心的態度が根をおろした頃の記録である。

I must have been about twelve years old when I began to see how determinedly those girls patronised me. I was told I was an orphan. There was no other orphan among us; and I perceived... that they conciliated me in an insolent pity, and in a sense of superiority. I did not set this down as a discovery, rashly, I tried them often. I could hardly make them quarrel with me. When I succeeded with any of them, they were sure to come after an hour or two, and begin a reconciliation. I tried them over and over again... They were always forgiving me, in their vanity and condescension. (Bk. II, ch. XXI)

子供達は気の毒がって彼女の癩癩を静めてやろうとするのに彼女の方では彼らの気の毒がりが優越的な態度に受取れた。すなわち癩癩持という病気をもっていてそれに同情されると、孤児であるという劣等感も加わって、プライドが傷つけられ被害意識に捕われる。そして自分が悪いと思わずに、孤児であるために周囲の者が勝ち誇るのだとこじつけをつくり、自らを欺いてそれを発見だと思ひ込み、以後はこの発見を確認することに病的な悦びを見出していくのである。自分の否を認めたくないという彼女のプライドが被害意識を生むのであるが、その開き直ったプライドは、この 'History' の書出し、

"I HAVE the misfortune of not being a fool. From a very early age I have detected what those about me thought they hid from me."

(Bk. II, ch. XXI)

という得々と自信をもった様子にあらわれている。自己を欺いた結果である⁽²⁾が、今では自分の誤りに気付かないのであるから、ミス・ウェイドは精神病的である⁽³⁾。

ドリットもミス・ウェイドも心の疚しさがあって咎められないのに自己弁護することがあるがこれが最も多いのがミセズ・クレナムである。彼女は結婚し

たばかりの夫に恋人と子供があることを知り憎悪にかられて彼らを復讐して不幸に追いやった。そしてこの復讐の一環として遺言書を隠蔽し入獄しているドリット一家を見殺しにする結果にもなる。彼女は厳格な宗教家で、これすべてを宗教の名でもって神の部下たる罪の執行者として行うのであるが、疚しさは意識から消えない。彼女の不法行為をそれとなく察した息子に償いをするよう申し出られると、思わず腹を立てて自己弁護的に言う。

But let him look at me, in prison, and in bonds here. I endure without murmuring, because it is appointed that I shall so make reparation for my sins. Reparation! Is there none in this room? Has there been none here this fifteen years?' (Bk. I, ch. V)

‘my sins’ と宗教的一般的な言葉でごまかしているが、ここに入獄しているドリット一家への罪意識があらわれている。最後に罪の告白を余儀なくされたときに、その最大の犠牲者の一人である息子にだけはそれを隠してほしいと頼んでつぎのように言う。

I would not, for any worldly recompense I can imagine, have him in a moment, however blindly, throw me down from the station I have held before him all his life, and change me altogether, into something he would cast out of his respect, and think detected and exposed.

(Bk. II, ch. XXXI)

告白後もまだ ‘however blindly’ と言ってあくまでも自分のしたことは正しいと意地を張るのであるが、上の言葉は傲慢で強情一筋にみえた彼女を複雑にしている。つまり罪を認めようとしなかったプライドの裏には罪を知られることへの恐怖があったのである。

以上三人の人物を扱ったが皆共通して劣等感や罪意識があってプライドを蝕んでいる。プライドは客観的な目を閉ざしてしまっただけにのみ集中させる強烈なエゴイズムによって支持されている。そのために自意識ばかり強くなって劣等感や罪意識のためにプライドが絶えず傷つけられようと脅かされている。そして自己を欺くことによってそれから逃れようともがけばもがくほどその意

識を深めプライドが益々傷つけられる、というように閉じ込められたプライドは自意識によっていためつけられている。彼らの目には周囲は嘲ったり責めているように見え、自らの恐怖心が作った妄想によって傷つけられ、自らが自らを傷つけるという神経病的な状態になっている。

VI

以上、第二節と第三節において *Little Dorrit* の善良な人物とエゴイステックな人物のプライドを扱った。複雑なのは後者の方であるが、我々はまずディケンズが後期になっても前期の人物に特徴的な「タイプ」の域を大きく出なかったということを認めなければならない。ディケンズは、*Great Expectations* には例外があるにしても、所詮終始エゴイストとその反対の人物を書き分けたのである。そして初めからエゴイストの心理を描く方に大きな興味もっていた。それが前期によく現れる冷血漢や犯罪者の心理描写となったのであるが、彼らは断片的には非常にリアルに描かれた。*Dombey and Son* のドンビーとイーディスは同じエゴイストでももっと普通の、さほど悪人でない人物の、人間関係の点から微妙に反応する心理を全体的に描こうとする最初の試みである。その中心がプライドである。プライドは人間関係に起る基本的要素であり、彼らのプライドが杓子定規だという嫌いはあるにしても、それを通じて周囲に対する心の動き、葛藤がかなり成功して描かれた。*Little Dorrit* ではプライドがさらに激しい劣等感、被害意識、罪意識に脅かされるさらに病的な心理となって掘り下げられている。ドリット等のエゴイズムは客観的な目を閉ざしてしまい神経病的にするほど強烈であるが、そのために彼らは正常に意識を働かすことのできる人間でありながら精神病患者のような振舞をするという不自然さが生ずる。しかし彼らはエゴに集中し、神経病的になっている人間の心理のドラマ化であり、それが拡大されていると思えばよい。確かにその心理には真実があるのである。ドリットのようなエゴイストもリトル・ドリットのような完全にエゴイズムに欠ける善良な人物も現実には存在しない。その両者を合わせて初めて真の人間になりうるのである。こう書けばディケンズの性格描写に対す

る非難を呼び起すことは必定であろうが、ここではそれに同意することも弁護することもしない。唯、それがディケンズのヴィジョンであったということ、いわゆるリアリズムによる性格描写のみが真であるかどうかは反省を要するというを述べるだけにする。*Little Dorrit* の例を見てわかった通り、善良な人物にもエゴイストにもプライドが植えつけられ、周囲に反応する心理を表わす媒体となっている。ここで論じたわけではないが、善良な人物に関しては、ディケンズの小説一般に於いて、プライドによって次第に我の確立が見られるようになったと言えよう。それはオリヴァー・トウィストからディヴィッド・コパーフィールド、そしてピップへとという図式的な系列にも代表されるであろう。またエゴイストに関しては、プライドによって自意識をもつようになったと言えよう。この変化は分析的になり、円熟したディケンズを物語るであろう。しかしそれが文学的に必ずしも発展であるかどうかはディケンズの前期の人物の否定し難い魅力によっても疑問を投げかけられる。ここではただディケンズの性格描写は中期以後分析面において発展したと述べておこう。

〔註〕

- (1) その顕著なものとして Edmund Bergler, "Little Dorrit and Dickens' Intuitive Knowledge of Psychic Masochism," *American Imago*, XIV (1957), 371-388.
- (2) ミス・ウェイドの対であるタティコーラムは次のように言っている。
I used to think... that people were all against me because of my first beginning; and the kinder they were to me, the worse fault I found in them. I made it out that they triumphed above me... when I know—when I even knew even then, if I would—that they never thought of such a thing. (Bk. II, ch. XXXIII)
すなわちミス・ウェイドも、もしその気があれば自分の誤りに気付いたことであろう。
- (3) ミス・ウェイドの自己欺瞞と被害意識はプライドの点からだけではなく、異常心理学から説明され得る。Lionel Trilling は *The Opposing Self* (London, 1955) の中で彼女について "the classic manoeuvre of the child who is unloved, or believes herself to be unloved—she refuses to be lovable, she elects to be hateful." と指摘し、それを Edmund Bergler は上記(註(1))の論文で masochism として敷衍している。Bergler は "Miss Wade is not only victimized, but provokes her victimization" と言っている。